

住まいと暮らし

■住まいの移り変わり

福生市域の古くからの集落は、湧き水があつたり、浅く井戸を掘ることができるので多摩川沿いの段丘上に集まつていて、水の便のよい場所を選んで家をつくり、人びとは周りの田畠を耕して暮らしていく。

た。

福生村では、永田、長沢、中福生周辺が、熊川村では南、内出、鍋ヶ谷戸がそのような自然条件に恵まれて早くから集落が開け、南または東南向きの日当たりのよい広い敷地に家が建てられていた。

一八九四年（明治二十七）に青梅鉄道



生糸商の家（福生 明治42年）草屋根の大きな家。広い庭に面して風除けの木が植えられ、左手には洗濯物が干してあるのがみえる。



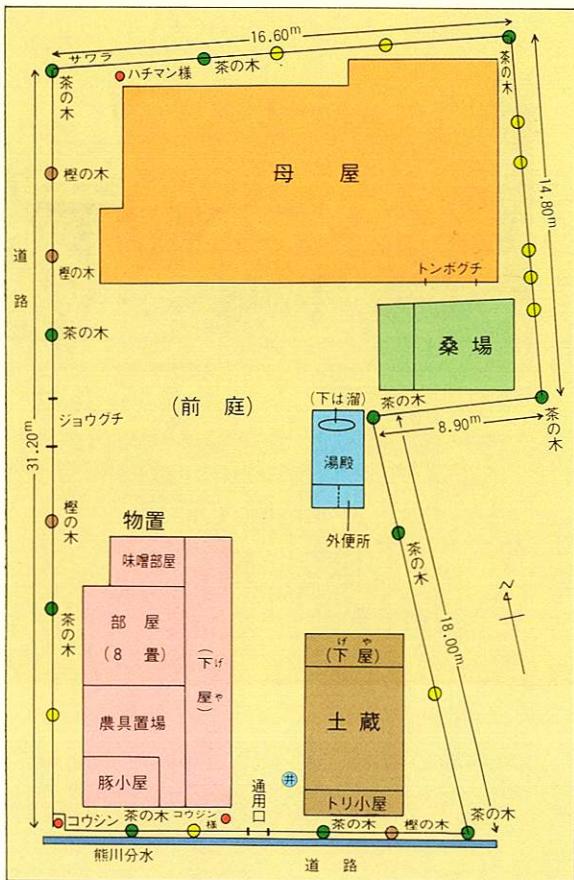
畑と家（熊川 昭和25年）

昭和になると、人や物の集まる福生駅前には商いをする家が建つようになり、また太平洋戦争前に武藏野台地に多摩飛行

場ができ、牛浜駅ができると、その周辺にも家が建ちはじめた。

昭和二十年代後半から三十年代にかけては上水道が整備され、それまで水の便が悪かつた青梅線東側や武藏野台地、多摩川沿岸の耕作地なども開発されて、団地や住宅地に変わつていった。高度経済成長期とも重なつたこのころ、古い民家は次々と建て替えられ、昔からの生活様式は大きな変化を遂げることになった。

ここでは、伝統的な暮らし残つていた大正から昭和にかけての農家の住まいを紹介する。



石川家の屋敷構え(昭和初期)

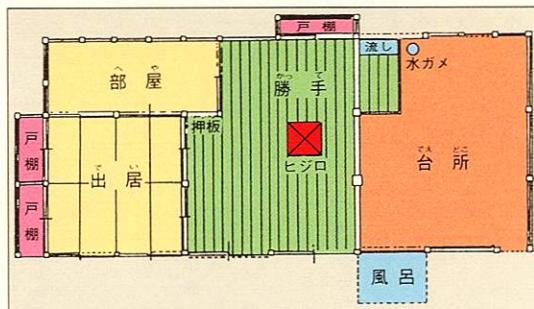
■屋敷構え

熊川の南地区に八代前から住む石川家は、昭和の初期ごろ、母屋と広い前庭、土蔵、物置、桑場（桑の貯蔵場）、湯殿、外便所がある屋敷構えであった。母屋は、南向きで間口七間半、奥行き四間半の大きさで、二階は蚕室になつていていた。土蔵の一階は、米俵、麦俵などの食糧が保存され、二階には、客用の布団や晴れ着が入つた箪笥、長持ちがおいてあつた。

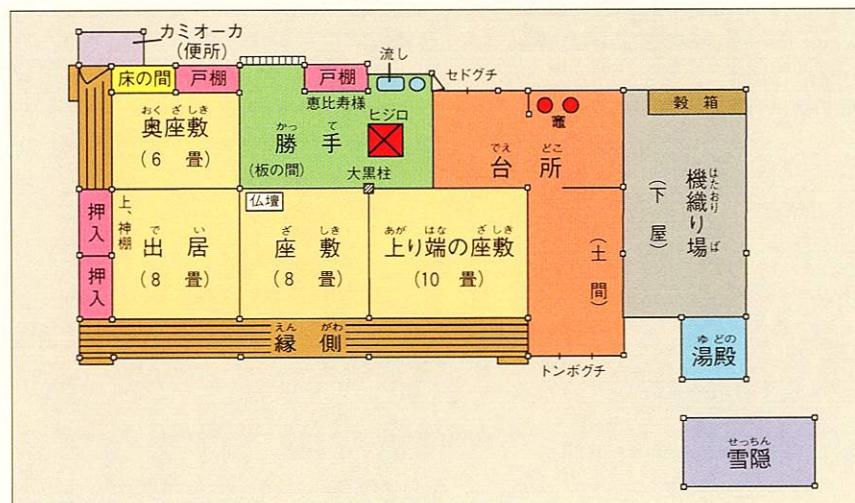
物置は農具置場で、一角には味噌部屋と豚小屋もあつた。隣との境には、茶の木などが植えられ、風除けに樅の木も植えられていた。家の南側には、一八九〇年（明治二十三）にできた熊川分水が流れしており、生活用水として使われた。一九五五年（昭和三十）ごろには、母屋は草屋根（小麦桿と茅で葺いた屋根）



鈴木家の外観（昭和61年）



鈴木家の間取り復元図 建築年代は江戸中期頃と推定されている。



からトタン葺きに変わり、湯殿は家のなかに取り込まれ、外便所もなくなつた。

■昔の間取り

福生（志茂地区）の鈴木家は、江戸時代から明治初期にかけての古い農家のたたずまいを残して

いる。調査によつて復元された当時の間取りは、武藏野の民家に多くみられる、台所、勝手、出居^{でい}、部屋のある広間型とよばれるつくりであつた（前頁の図参照）。家の北側は、窓や戸がほとんどなく閉鎖的で、家族が寝る部屋は真つ暗であつた。土間の台所

は広く、勝手との境に建具はなかつた。縁側もついていなかつた。



伊東家の神棚と押し入れ(昭和61年) 座敷側からみた出居(でい)のようす。押し入れの戸は木製で、長い年月を経て黒光りしている。

明治、大正にかけて養蚕がさかんになり、従来の天然育から温暖育という新しい飼育法に変わると、それにともない農家の構造や間取りも大きく変化した。福生の加美地区に一八四一年（天保十二）から住んでいると伝えられる伊東家は、一九二四年（大正十三）に家のなかを大改造した。土間に新しく板の間の部屋（上り端の座敷）をつくつたり、縁側を内縁にしたりして、蚕を飼いやすくし、機織り場を広げ、出入りを便利にするため、入口の大戸を引きちがい戸に取り替えた。昭和になつて、飼育法が桑桑育（桑を枝のまま蚕に与える方法）に変わると、屋外に条桑小屋をつくつて飼育するようになり、家全体が養蚕場とならずにすむようになつた。

■部屋の使い方と暮らし方



縁側でお手玉をする女の子(中福生 大正期)

古くは納戸とよばれた奥の板敷きの間は、簾笥や長持ち、布団をしまい、夜は家族が寝る部屋であった。昭和になると畳が入って、奥座敷とよぶようになった。床の間は、大正から昭和になつてつけられたものと思われる。ここでお産をし、人が亡くなつたときはこの部屋に北枕に寝かせた。

出居は、親類や大事な客をもてなす部屋で、家のなかでいちばん最初に畳が敷かれたのはこの部屋の場合が多かつた。神棚があり、夜は、主人夫婦や子どもの寝室となつた。

座敷は、ふだん客を迎える部屋で、女性が針仕事をしたり、子どもが遊んだりする場所でもあつた。

ここに仏壇をおく家が多かつた。出居との間の襖をはずすと二間つづきの広い部屋になり、祝儀、不祝儀、お日待ちなどで人が集まるときに使われた。

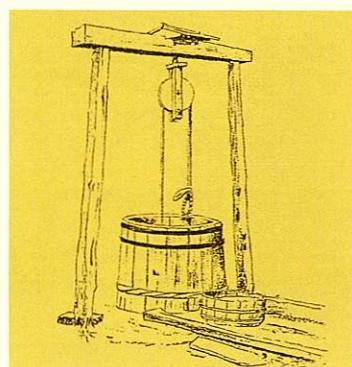
勝手は板の間で、台所よりにヒジロがあり、上からオカマサマ（自在鉤）を下げて、鉄瓶や鍋を掛けて煮炊きした。家族はいつもここで食事をした。ヒジロの周りの座る場所は、大黒柱に近い奥の座が主人で横座といい、反対の台所側を木尻（木じり）とよび、嫁が座つた。主婦は主人の左側、客は右側に座るのがふつうであつた。

台所は土間で、昔はかなり広くとつてある家も多かつた。秋から冬に墓仕事（わらわら）をする場所にもなり、味噌や餅をついたりする作業場としても使われた。台所の隅には、大小二つの竈があり、これでご飯を炊き、湯を沸かした。竈の上には、荒神様（こうじん）が祀られていた。

湯殿は、古くはトンボグチ（家の出入口）の近くにあり、大溜（おおだめ）（地面にいけた大きな桶）の上に板を渡



草屋根の葺き替え(牛浜 昭和61年)



釣瓶(つるべ)井戸(熊川 明治末年 森田浩一・画)

して風呂桶をのせ、簡単な匂いをしたものであつた。湯は沸かして風呂桶へ運んだ。洗うためのものではなく、体を温め汗を流すだけのものであつた。雨が降ると吹き込むので、傘を立てて入つたという人もいる。のちには、据え風呂といつて釜で焚く風呂に変わつた。屋根のある別棟の湯殿ができたのは、大正から昭和にかけてで、家のなかに湯殿ができたのは、太平洋戦争後になつてからであつた。

便所も、風呂と同じように大溜の上にあり、畠仕事のときに利用できる外便所(雪隠)があつた。子どものころは、夜、外便所へ行くのが怖かつたと思い出す人も多い。家のなかに便所ができたのは、大正から昭和にかけてであつた。

昔は、井戸を掘るにはたくさん費用がかかり、地下水が深いところもあつたので、数軒で使う共同井戸(モヤイ井戸)が多かつた。同じ井戸を使う家同士で、井戸の縄ないや井戸替えを行つた。古くは撥釣瓶(はねつるべ)だつたが、昭和に入つて、滑車のついた釣瓶(つるべ)井戸に変わつた。風呂の水などは、玉川上水や熊川分水に汲みに行つた。水汲みは女性の仕事で、水の入つた重い桶を天秤棒でかつぐのは重労働であつた。

夜の明かりは、石油ランプが使われていて、ランプのホヤの掃除や油の買出しあは、子どもたちの仕事であった。一九一五年(大正四)に福生村の一部に電灯がともつた。はじめてみる電灯の光は、太陽よりも明るく感じられたという。昭和初期には、ほとんどの家に電灯がついたが、停電も多くどこの家でもろうそくを備えていた。